

人権だより

No.316 (2024.9)

人権・同和教育座談会に参加して

人権委員長 6年 4組 平田 瑠花

私は先日6年生の人権委員が参加した講演会の中で、結婚時に部落差別を受けた女性のお話を聞いて考えたことと、それを通してみなさんに伝えたいことについてお話します。

涙ぐみながらも自分が受けた不当な扱いと、その時の気持ちを懸命に語ってくださったその女性は「お前、部落出身なんやろ?」とご主人のいとこの男性に言われるまで、自分の生まれ育った場所が被差別部落だと知らなかったといいます。突然のことに何もできず、その事実を知ったご主人の母の「絶対に結婚を許さない」という厳しい態度に女性は一度ご主人と結婚することを諦めました。彼女はそのときのことについて「もっと学校での人権教育を真剣に受けていればよかった。他人事だと思っていた。そうしていたら、自分にも他人にも、もっと違った行動が取れていたかもしれない」と強く後悔したといいます。それを聞いて私は人権教育の重要性を再確認しました。みなさんは、人権・同和教育HR活動や人権だよりの放送の際に、真剣に考えることができますか?どこか他人事のようには考えてはいませんか?差別とはいつ直面するか分からないものです。自分が差別を受ける本人でなかったとしても、あなたの家族が、友人が、恋人が、いつどんなことで差別を受けてもおかしくありません。そんな時、大切な誰かが傷つくのを見過ごさず、差別を許さない姿勢をとれるように真剣に学びましょう。

女性はその後、一度別れたご主人と偶然再会し、今度は反対されても意思を貫き通し、ご結婚されたそうです。義母とは仲が深まってきたそうですが、それでもまだ日常のささいなところで差別的な行動をとられるといいます。女性は「いつか差別は間違っているのだと義母が気付いて謝ってくれるのを待っている。それまで根気強く説得し続ける」と語ってくださいました。

この女性も、そしてこの女性のように自らが差別を受けた体験を発信し、差別を無くしていこうと行動し、理不尽な差別と闘い続ける方々を、私は本当に尊敬しています。しかし、その道はどれだけ険しく厳しいものでしょうか。差別に立ち向かうべきは、差別を受けた本人だけではなく、私たちも、まずは自分や身近な人々を守るために、それから、視野を広げて、世界の人権問題の解決のために動きましょう。まずはその第一歩として、人権教育を今一度真剣に受けてみませんか。

【保護者の声】 文章を読んだPTA 人権委員の方の感想です。

差別は自分が被害者の立場に立たされる事が無いと、なかなか真剣に向き合う機会が無いと思います。これから先、自分が当事者ではなくとも、家族や大切な人を守るために正しい知識を身につけておくことは大事だと思いました。(6年生保護者)

【人権委員研修報告】

8月9日 宇和島市人権教育協議会現地研修会参加

(ハンセン病療養施設長島愛生園:岡山県)

～長島愛生園を訪れて～

僕が長島愛生園を訪れて記憶に残っていることは二つあります。一つ目は実際の病棟の建物を訪れたことです。かなり古びてボロボロになった建物や消毒風呂など、決して本や動画を見るだけでは分からない感情を肌で感じることができました。もう一つは、実際のハンセン病患者だった方の講演です。こちらも生で直接訴えかけられているような感覚でした。その方が最後に「ハンセン病患者は子どもを持てなかったので、この事実を伝えていく次世代がない」とおっしゃっていました。



今回の研修を通じて僕は、実際に現地に行って、その歴史を肌で触れることの大切さに気づきました。そして、次世代へ伝えていくバトンを渡されたような気がしました。講演の最後の訴えを受けとめて、バトンをしっかり渡していけるようにしたいです。



～長島愛生園現地研修～

長島愛生園の現地研修に行って、とてもたくさん大切なことを学べたと思います。研修に行く前はハンセン病について、その病気がどういったものかぐらいしか知らず、偏見や差別されてきた歴史などについてはあまり知りませんでした。実際に現地に行き、話を聞いたりして、ハンセン病の歴史などについていろんなことを学んで知れてよかったです。また、長島愛生園でのその当時の暮らし方やどんなことがあったのか等を知れて、より関心を持つことができました。研修に行って、特に印象に残っているのは監房です。こんなところに入れられた人たちがいたことを聞いて驚きました。現地で「体験談を聞いてハンセン病についてもっと知ってもらいたい」といった言葉を聞いて、自分たちも少しでも多くの人にきちんとハンセン病やその歴史について知ってもらえるようにしていかなければいけないと思いました。そして、差別や偏見を少しでも無くせるようにしたいと思いました。



